
悪魔の仮面と彼女

くわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の仮面と彼女

【Nコード】

N4903J

【作者名】

くわ

【あらすじ】

地獄だった受験を終え、やっと少し休めると思った夏の夜、春坂コウスケは悪魔に堕ちた。幸運と寿命を引き換えに魔力を得た少年コウスケといきなり現れた銀髪美少女。悪魔が人に幸せを与えるちよっとおかしな物語。暇な時にちよっと見てください。

プロローグ（前書き）

初めての投稿です。カンマ、脱字、など色々ミスがありますが優しく見守ってください。自分の小説が人に読まれる、、緊張です。

プロローグ

俺は春坂コウスケ。

人生で十六度目の夏を迎え、一月にあった受験なんて記憶のかなたにいつてしまった。

夏の蒸し暑い夜、体に違和感を覚えて自分の時計を見たら朝四時半、日曜の朝はそこまで早く起きる必要なんかこれっぽちもない、ともあれこのまま寝れるほど眠くなかった。

いやいやベッドから起きて、ベッドの上で軽くストレッチ、体の間接を慣らしていて息ついた。

顔を洗おうとバスルームにいき、鏡をふと見上げると、

俺は悪魔だった。

悪魔の仮面と漆黒の鎧のような俺の体であろう存在。

体は完全に人間の原型を留めてなく、背はあまり変わってはいなかったが、肩幅、太さ、重量感、それはもう人間のそれではない。

だが、数瞬それが何で俺が何だか分らなかった。

そして俺がその鏡に映った悪魔だと気付いた。

鏡に手を伸ばして、確信した。

「俺が悪魔」

後ろ方向かが着地したような音が聞こえた。

「やっと見つけた！ 私の使い魔」

その夜から俺のごく一般的な高校一年の日本国の一般市民の日常は音を立てて崩れ去った。

プロローグ（後書き）

感想、評価など持ってます。大歓迎だぜ。
まだ幼い俺なので温かく見守ってください。

超カワイイ（前書き）

はやめにUP

超カワイイ

目を開けたらもう朝だった。

昨日のダルさなどは残ってない、けどやはり何かが俺の中で渦を巻いている。

「夢だったのか？」

昨日のあれは夢だったのかと自分に問いかけてみた。体に違和感はないし、自分の顔を触ってもいつもと変わらない特徴のない俺の顔だと再確認した。

はあ、とため息をついたら一階から母さんの声がした。朝飯のとことだった。

しかたねえなと痛む腰を上げると俺の目に入っただのは仮面。

仮面だ。

昨日の俺の顔を同じ。

悪魔の仮面が俺の勉強机の上にあった。

腰の痛みなど忘れてベッドから起き上がってデスクの前にいった。

ごくりと生唾をのんでおそろおそろ俺はそれ（悪魔の仮面）に手を延ばした。

手につとつてみて分かった。

本物だ。

「マジか？」と呟いたら急に俺のヘアのドアが開いた。

「何やっての？もう飯で出来てるぞ」

俺の弟翔太だった。俺とは三歳違いの弟。顔は中の下、成績は国語がずば抜けて高いが、その分、数学の成績が低い。背は145CMくらい、けどまだ子供っぽい。

あわててその仮面を背中後ろに隠してその場をやり過ごした。考えた、少しの間、そして

「信じらんねー！ー！！」

叫んでみた。

通学路であの悪魔の仮面のこと考えながら学校に向かって歩いていたら、学校は徒歩十五分くらい、夏なのに、歩きたくねええ、などとうなだれていた、そして、自分の思考を元に戻す、昨日の夜俺が何を見て何が起こっているか、自分でも意味が分からない、理解不能だ、それでも、今俺のバッグの中に入っている仮面は本物だ。

「頭の中が活動停止だぜ」

声に出して言ってみた。

諦めずに再度確認してみる。

「ええっと、昨日の夜の夢？だったっけなあ。最初に体がだるいと思っただけで、鏡見たんだよね」そして俺は見たんだ、この仮面をつけている悪魔を。んで、後ろから音がして、声が聞こえた、

「やっと見つけた！私の使い魔」

「女の子の声だったよなあれ」

そのあとはわからない、目を開けたら朝だったから。

「あああ！わからん！わからんぞ！」

また叫んでみた、その時、左の肩が叩かれた。「よっ、コウスケ！」

山田だった。

「何叫んだよお前、ついに狂ったか？　そうか狂ったか、うんうん、わかるわかる俺もお前のくらいときなぜだか気持ちが高ぶってなあ」

一人で勝手に解釈して話をすすめるな。

「いや、たかぶってねえし狂ってもない」

こいつは友達の山田春義、いつも元気で少し幼稚な頭の持ち主、成績は俺より少し下、中の下つてとこ。

「お前さっきから何叫んでんの？　悪魔がどうとかいってた？」

「いやまあ、なんでもねえよ、昨日変な夢見てな、ちよつと考えた」

「いや、叫ぶ必要はないだろ、ふつつ」

そんな会話をしながら学校に行った。

学校の授業はまあ頭に入ってくるわけがなく、一日ぼーっと過ごした、それも頭が白旗を上げて俺の思考活動を緊急停止。ちゃっちゃか荷物をまとめて帰る。徒歩十五分くらいはなれた家へ一直線で帰り、気付く。やけに体が重い、朝は何ともなかったのに、テキストに飯済まして早々に寝るかと思いきや速攻で飯を済まして、二階に上がった。

二階に上がった時には死ぬほどにねむかった、そして、ドアを開けると、俺のベッドにだれか座ってる。こんちは、とかわいい声が聞こえた。体の疲れがピークに達し、意識が朦朧として、その声の持ち主が誰か、何故ここにいいのか、そして何故その声の持ち主がこんなに可愛いのか、俺はそのまま倒れるようにその子に向かって倒れてしまった。

「いや、な、何！ー！うわ！きゃ！」
俺は意識を失う前に思った

「超カワイイ」

ストライクゾーンにSTRIKE

何か暖かい枕だ、そう思い寝がえりを打とうそするとプニとかポヨンなどという効果音が付きそんな感触が返ってきた、それと同時に何か物凄く萌える声が聞こえた。

「いつまで人の膝でいい夢見てるのよ」

その声に驚いて布団から飛び上がると、彼女はいた。俺のベッドの上で正座を少しくずした感じで座っていた。

「あのう、誰ですか？」

緊張して何故だか畏まる俺、その問いに答えるように彼女は前髪を？きあげた、そして言い放った。

「こんにちは、私はキネット、ルシュファ、アームストロング、爵位を持つ立派な貴族よ、あなたに会うため遙々遠い国からやってきました！」

でーん！！

彼女は間髪いれずに言い続ける。

「アームストロング家は代々の魔物使い、まあ悪魔との契約ができる家系の私はお姫様、であなた私の使い魔、予定どう、わかった？」

俺は彼女の話の黙々と聞いていたが、右の耳から、左の耳へと流れていく、こういうことだ、全く意味が分からなかった。

「母さん、誰か変な子が俺の部屋にいるよー」

そう言ったらその彼女は何かびっくりした顔で俺に向かって手を伸ばして、一瞬ビンタでもされたかと思ったが、その手は一直線で俺の口に伸びて、カワイイ小さな手で俺の口を力づよく抑えた。

「ふがつ、何を!？」

醜い悲鳴を上げたら、彼女は右手の人差指を自分の口元へと持ってきて、シーッと合図してきた。

誰もその声に気付かずに彼女はほっと肩をなでおろす。俺は何とか彼女の手を口から引っぺがした。「ちょっと、あなた何考えてるの? 勝手に入っただのがばれたら警察呼ばれるじゃない!」
いや、呼ばれて当然、おまけに自分で不法侵入って言ってるし。

「一旦整理しよう、俺は春坂コウスケ、お前は誰だ? 何が目的だ?」
立ち上がりその子はいやな顔をしながらしょうがないと話始めた。
どこから話そうかしらと言って、一分くらい経過していた。

「あのう、まだですか?」

俺は基本的に知らない人には敬語を使うようにしている、だってそのほうがカッコいいでしょ?

「OK、わかった。じゃあ率直に話すわよ。あなたは昨日の夜、午前四時くらいに、堕ちたのよ、悪魔にね。」

十秒くらいの沈黙の末、俺が変な声を上げる。

「意味不明でつすYO!!」

キネットと名乗る女の子（見た目14〜5歳のまだ未発育少女）が

ええ〜とめんどくさそうな声を上げる。ああっと彼女の上の電球が光った。そしてもう一度彼女は言い始めた。

「あなたあれ持つてる？」

「あれって何ですか？」

あれじゃあからん。

「あれよあれ、仮面よ。悪魔の仮面。あなたが起きた時、その仮面近くになかった？」

俺はびっくりとして、何故にそれを！？という奇声をあげた。正直に言ってほうがよいのかと思ったとき彼女が言った。

「あるのね、出してちょうだい」

「はいはい、ありますう」

そう言いながら俺は鞆の中にあるそれを取り出す。黒く、金属で出ているのかというくらいに重い。二本の角が両方の耳のあたりから、生えている。これがリアル鬼の形相だなあ。俺はそんな見えて気持ち良くないモノを彼女に渡す。

「やっぱり持ってたわね、ふむふむ、なるほど、これはかなり、へえー。」

えっ、何？で？どういうこと？

「あなた、すごいわね。堕ちた時から上級悪魔なんて、ちょっと信じられないわ。」

そう言いながら、彼女は俺のことを珍しいものを見るような眼で見てる。ここで彼女の容姿を説明しよう。背丈は150CMくらい、^{キネット}マッチ棒ですか！？と言いたくなるくらい痩せてる、だがそれでい

て優雅な体つき、胸はない、

気になる顔のほうは？

KANPEKIです。

俺はアニメでも見てるのか？と聞きたくなるくらい整っている。澄んだ蒼い瞳、小さい鼻と口、髪の毛は後ろで縛っているが、前髪は縛れてない。俺が一番驚かされたのはその色だ。普通この子のような若い女の髪の色ではなかった。

銀。

[illegible]

ないちった

それから数十分、俺はキネットの話聞いていた。

悪魔に堕ちるには、怒り、それも通常の明日になれば忘れるような怒りではない、黒く、マグマのような一生冷めることのない怒り、それが人を悪魔にする、らしい。

悪魔は凶運であり、災害であり、不幸であると、自分でも制御できない、そして人にも影響がある、悪魔はそれをばら撒く。人を不幸にし、自分を不幸にして、燃え尽きる、それが悪魔。

一番の不幸は寿命、これが急激に短くなる、もとの寿命の四分の一程度に短くなる、

誰にも見てもらえず、独りで死ぬ、それが悪魔。

そんな話を聞かされて、はいそうですか、と信じれるはずがない、それが人、悪魔に堕ちると物事に関心が無くなる、人が死のうが、自分の寿命が縮もうが関係ない、そう思えるのが悪魔に堕ちた人。まだ俺は信じ切れてない、そしてキネットが言った。

「その仮面かぶってみて、そしてら嫌でも信じるから。」

そう言っって持っていた悪魔の仮面を差し出す。

俺は被りたくなかった、それも当然、そんな不気味な仮面かぶりたくない、そしてかぶったら、俺は今の俺の現実から切り離される、そんな気がした、でも見詰めていると、不思議と被りたくなるそんな仮面。

俺は手に取りおそるおそる被った。それを。悪魔の仮面を体に違和感、一瞬何か重いものが体に被さった、そしてすぐに馴染む。

俺は悪魔になっていた。

キネットがどこからか持ってきた鏡を俺にを向ける、俺は気付いた、そして気付かされた、自分の人間だったころの姿形がもうないことを。

そして手に入れた、新しい体を、別にほしかったわけじゃない。いつの間にか手に入っていた。

黒い体、鎧のような体、もう戻れないそう感じた。

鏡を通して、俺の顔、悪魔の顔が笑っている、そう思えて、手放す人の面影を、手放す人の体を、そして諦める人間に戻ることを。

だが俺は嫌だった。認めることも、俺が堕ちたということも、それは俺が死ぬということ、不幸にもなるということ、もっと生きて、生きて楽しむんだ。俺は嫌だ。

俺は気付くと、もとに、人に戻っていた。

「あれ俺は？悪魔になったんじゃない」
そして気付く。

自分が号泣し、頬を赤くして、泣いていることを。

悪魔ですた

俺は気付く、またキネットの膝の上で寝ていることを、けど、まだ起き上がりたきないな。もう少し甘えていたい、まだ会って一時間も過ぎていないのに俺はキネットにそんな感情を抱いていた。暖かい、ふわふわしてるような、やわらかい膝の上でもう一度寝てしまいたいそうになる、が、そんな世の中上手くいくはずがない、キネットがいきなり立ち上がった。その勢いで、俺は床に頭をガツンと、ぶつける。

「あなた何時まで私の膝の上にいるつもり？一分2500円よ。」

「いやあもうちょっと天国にいたかったなあ。」

俺はいやいや起き上がる。

「けどあなた、いきなり全身悪魔化なんて無茶すぎよ。悪魔化して十秒たたないうちに意識不明なんてねえ。まあ普通悪魔化するのも時間がかかるのに、悪魔になってすぐに全身悪魔化はすごいは」

なんだか褒められているような、いないような。

「なんですかその悪魔化って？ あと、俺はコウスケです、あなたじゃありません」

冷静に質問し、話を続ける。

「悪魔化っていうのは自分の魔力を使って、頭の中にあるイメージ、つまりコウスケのもう一つの姿を現実に具現化することよ。」

ポカーン。

意味わからん。

えっ何？俺って魔力なんて持ってたっけ？てかなんだそのウルトラファンタジーな話。信じられんぞ。さすがの俺（かなりの妄想力の持ち主）でもそんなありえねえ話信じられん。

「あおう、意味がさっぱりわかりません、説明してくれえ。」

そしてまた三十分くらいの一方的な説明が始まった。

悪魔に堕ちた人は、幸運と寿命を引き換えに魔力を手に入れるらしい、そして魔力は頭の中にあるイメージを具現化して現実にする。悪魔化するのは体に溶け込んだ悪魔の体をもう一度、いや、何度でも魔力を使ってこの世に持つてくることだ。普通、全身悪魔化には膨大な魔力が必要であり、悪魔になりたてはやはやの俺が出来るはずがない技だったらしい。

それにしても何故俺のそんな技が出来たのか分からなかったが、キネットが教えてくれた。

怒り、怒りの量が圧倒的に他の悪魔と違うらしい、俺の内に眠っている底知れぬ怒り、恨み、妬み、憎しみ、その全てが魔力に関係している。けど、俺は実際そんな感情持っていないのだけど。

「まだ、信じ切れてないご様子で、じゃあ何か魔法を教えてあげるわ」

「ええええ！？俺魔法使えるの！？どうやって？なんか唱えるの？」

「うっん、唱えるというか言うだけね、魔力は頭の中にあるイメージを具現化するだけだから。何か言ってみて」

「何を？」

「なにかよ」

うつん。考える俺。そして、きらりーん。

「滅びのバーストストリーム!!」

、、、、

しーん。

あつ!! やべ白けた。そしてなにも起こらない。

「あなた何よその滅びのバーストなんかかって？」

「いや、別に何も、てか、魔法使かえねえじゃんYO」
正直、超がつくり。

「じゃあ、炎をイメージする言葉はあなたにはある？」

「FIREとか？」

「なんでもいいから、イメージして言ってみて」

はいはいと、たらたらイメージする俺。

炎。熱く、燃える、灼熱の炎。自分の中のものを炎に変換するイメージ。

炎、永遠に燃え続ける、決して燃え尽きつことのない炎。体の隅々からエネルギーを掌に集めて、燃やす。

俺は言う。

掌の上にあるエネルギーを一気に燃やす。

そんなイメージで、言う。

「FIRE!!」

ポツという音を上げて燃え上がる灼熱の炎、俺の掌で踊る、決して消える事のない俺の炎、何もかもを焼き尽くすイメージで作り上げた炎。

俺の掌で踊っていた。

「ええええええ！？ 出来ちゃったよ！？ 俺って魔法使い？」

ああ、悪魔でした。

静かな眠り

自分の中からエネルギーを集める感覚。意識を集中し、体の外、体の中から集めていく。

自分の中でのイメージ、燃える炎、エネルギーに着火する。

俺の掌の上で踊っている、真っ赤な炎。

木がはじける音のしない火、ガスでも炭でもない、俺の何かを元に踊っている。

見詰めていると落ち着く赤い、冷たい炎。

俺の心が現れているかのように、灼熱の深い炎。

俺が無言で自分の心を見ているとキネットが驚いた表情で固まっていた。

「なっ、なんで、なんで出来るの！？そんな簡単にできる事じゃないのよ！毎日炎を見て、感じて、触って、そしてやっと出来る魔法よ！なんでそんなに易々と・・・」

「いや、お前がやれって言ったんだろ？」

俺の炎を指さしてプルプル震えているキネット、以外にこの表情もカワイイ。

その後、数十秒固まっていた彼女はやっと整理がついたように腰に手をあてて静かになった。

「で、これどうやって消すの？これじゃあ何にも出来ないんですけど」

「消えろっていうイメージで命令してみて。たぶん消えるから」

「多分て・・・ほいほい、分かったよ」

心を炎を沈めるように命令する。
自分に同化するように、命令する。

「消える!!」

俺が静まった声でそういうと、炎はすうっと消えた。
掌を開いたり閉じたりし、平気か確かめる。
やけどはない。

「あなたやつぱり凄いわよ。落ちてすぐに悪魔化できるといい、一
発で魔法も発動できるし、悪魔化に至っては全身悪魔に出来るなん
て、信じられない」

「俺も信じれねーよ。あと俺はコウスケだって言ってるだろ？名前
を言え」

「あなた、じゃなかった。コウスケ、今かなり危険な状態よ」

「はえ？俺は全然大丈夫だけど？」

「もうすぐ、コウスケは食われる、人であった者が、堕ちた者がコ
ウスケの力を食いに。それが自分の悪魔に飲み込まれる、自我がな
くなり、もう戻れない」

さっきまでの空気は一変し、静かにまじめに語り出すキネット。

「長くて三日、短くて後一日で死ぬわよ」

その衝撃的な言葉に動揺する俺。

「キネット、何をいつてるんだよ？俺は全然だいじょ、うぶっ!!」

くはっ！！」

自分で自分の喉を絞める、首を絞める。

「うえつつつ！止めついきがっ！」

俺の中で別の何かが俺の心をむさぼっている。自分が食われる感覚、四肢のどれかがなくなるような、自分が奪われるような、そんな痛み。

内側から意識を奪われる。さっきまでいなかった何かが俺を食らっている。

体が言うことを聞かない、動かない。俺は床に崩れ落ちる。体が操られている。

「きねっ、と、たすつ、て・・」

十分に悶えた後、自分とキネットしかない空間で俺はまた意識を失った。

体が重い、動かせない、熱っぱいし、だるい。
最低、最悪の目覚め、のはずだった。

俺は気付くとまたキネットの膝の上で泣いていた。

「あなた、何回意識失えば気が済むの？そんなに私の膝枕好き？」

やれやれつと言いたそうなキネットの顔がそこにはあった。

「後5回くらいかな？」

体はだるいけど痩せ我慢する俺。

「それだけ言えれば大丈夫ね。ほら起きて」

「うっ、頭がくらくらする」

「当然でしょ？さっきあなたの悪魔に食われていたのよ、だるくて普通よ」

俺はその言葉で思い出す。ほんの少し前、俺の中で何かが起こっていた。

自分がかかに飲み込まれ、自分を失う感覚。さっきまで暴れていた何かが今は静かになっていた。

それを鮮明に思い出すと俺は怖くなった、怖く。

血液が末端まで行きとどいていない。

寒い。

「さっきのは何だったんだ？今は静かだけど・・・寒い」

起き上がって、再度確認する。俺が俺であることを。

「さっきのは悪魔の浸食。コウスケの心を食って食いつくす、自分の体が悪魔に奪われる。奪われたらもうコウスケはコウスケじゃない、死んでるわ」

静かに、そして確かめながら言うキネット。

「コウスケはそのうち、悪魔に食われて死ぬわ」

衝撃的な言葉。

「ど、どうすれば、いいんだ・・・俺は死にたくない」

自分で体験して分かる、あれは俺を食いつくす。頭で理解していても、心が理解している。

「私が助ける」

「えっ？」

「私がコウスケを助ける。絶対に。だからもう休みなさい、目を瞑って。すぐよくなるから」

「だけど、ちょっと・・・」

キネットが俺の顔に手を当て、言った。

「お休み」

俺はまた静かに意識を失った。

静かな眠り（後書き）

くわがた大好きくわです。

久しぶりに返信してみました。この小説は誰かに見てもらってるのか？

誰が返事をくれー。

駄目だ、返事がないだだの屍のようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4903j/>

悪魔の仮面と彼女

2011年10月6日10時37分発行